



地域と共に 21世紀的課題に 立ち向かう福島大学

学長 三浦 浩喜

President MIURA Hiroki

東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故から10年が経ち、本学の震災復興の取り組みもまた10年を数えることとなりました。金谷川キャンパスの西側には、震災後、うつくしまふくしま未来支援センター棟が建ち、環境放射能研究所もそびえ立ち、食農学類棟も加えられ、すっかり変わった景色が震災からの歩みを物語っています。

そして現在、それらを上書きするかのように、令和元年度末に発生し瞬く間に世界中に広がった新型コロナウイルス感染症は、健康問題に留まらず、経済問題や人間関係、現代文化、ライフスタイル、国際的な政治の枠組みにまで影響を与え、本学も創立以来の不安定な状況が続いています。

現在の社会は「VUCA（きまぐれ、不確実、複雑、曖昧の英語の頭文字をとった造語）」と呼ばれ、現在の新型コロナウイルスに苦しむ、先行きの見えない世界がまさにVUCAを象徴しています。しかし厳しい状況の中にあっても、社会はコロナの被害を最小限に留め、これまで滞っていたオンラインを始めとするさまざまな技術革新を進めています。常に変化し続けるVUCAの中で物事を考え、実践し、変えていくライフスタイルが広がりつつあります。

昨年、新学長プランとして「福島大学ミッション2030」を公表し、震災・原発事故からの学びを活かして、人口減少や少子高齢化、環境問題やエネルギー問題、農業再生などの「21世紀的課題」に、地域と共に立ち向かい、「新しい社会づくり」に挑む大学として、自らの使命を明確にしました。新しい状況下の大学の目的は、一人ひとりが、そして社会全体が豊かに、希望に満ちて生きていけるライフスタイル（個人のWell-being，社会のWell-being）の確立であり、その実現に向け本学では様々な課題に取り組み、新しい価値を創造することのできるイノベーション人材を育成していきます。

本学は、学生たちと共に地域の諸課題に取り組み、「新しい社会」のあり方・形を示すために、教育組織や研究組織、地域との連携の形も刷新し、地方国立大学の新しいあり方を示そうと考えております。そのためにも、本学への率直なご意見、ご提言、ご相談を賜りたいと考えております。

今後とも、引き続きご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

基本理念：地域と共に21世紀的課題に立ち向かう大学

人口減少・少子高齢時代における地方の「新しい社会づくり」の実現・モデル化

福島大学は高等教育機関として、東日本大震災とそれに伴う原発事故を経験し、他大学に先駆けて教育やコミュニティ、環境、エネルギー、農業などの様々な問題に組織的・総合的に取り組んできました。これらの知見を集積させ、「地域と共に21世紀的課題に立ち向かう大学」として、目の前の問題解決に取り組みながら、新しい時代の社会システムを提案できる大学を目指します。

新しい社会と大学の目的	第4期における大学のあり方	人材育成方針
■ 地方分散型で経済の低成長時代を人間的、創造的に生きていく知恵と技術 ■ 人口減少・少子高齢社会でも、一人ひとりが豊かに、希望に満ちて生きていけるライフスタイル ■ 個人の Well-being, 社会の Well-being の実現をめざす大学	■ 社会に開かれ、異質な人々が出会う場 ■ これからあるべき社会の姿を共に探究 ■ 新しい社会をつくるための思想や価値観、知識や技術、構想力や実践力を獲得 ■ 試行錯誤、実践と反省を繰り返し新しい社会を生み出す「社会づくりの実験室」であるべき	■ アカデミックな学び、震災・原発事故からの経験を活かす ■ 10年先の課題を見すえた人材育成 ■ 地域および世界の「21世紀的課題」に取り組むイノベーション人材の育成 ■ 未来志向的、社会のハブ、困難な問題解決に挑み、社会の価値観や技術を創造的に再構成しようと挑む人材

教育のあり方

- 地域の現状・課題と大学での学びを集合、地域実践型プロジェクト学習を拡大
- 人材育成方針をすべての教育課程に通貫、学士課程から修士課程までの教育をシームレスに連続
- 基礎的な知識の習得と実社会での応用、地域と世界の問題発見、異文化コミュニケーション、問題解決にむけた主体的な学習、などを高度に融合
- PBL, ICT, STEAM, グローバル, シティズンシップ等の教育を充実

研究のあり方

- 地域課題・21世紀的課題に対応した基盤的研究を政策的に強化、既存の学類・研究科の研究の「強み」を明確化
- 人文・社会・理工・農の各分野の高度な融合と総合性を実現させるために、異分野間の共同研究を推進
- 「発酵醸造研究所」を設置し、「浜通り地域の国際教育研究拠点」へ積極的に参画し、大学全体の研究・実践フィールドとして位置づけ

地域貢献のあり方

- 地域社会に新しい形を提案し、10年後を見すえた地域の在り方を追求
- 大学としてなすべき社会貢献の在り方を再構築して重点化
- アクション・リサーチのように教育・研究に還元される仕組みをデザイン
- 地域と協働し、学生の学びの場・研究のフィールド・地域の課題解決の3つの領域を有機的に融合

教員養成・附属校園のあり方

- ICTやPBL, アクティブラーニングなどに対応できる教育者養成の高度化
- 少子化を踏まえた経営を含む抜本的な改革、全学附属としてのメリットの強化

組織・運営のあり方

- 「地域と共に21世紀的課題に立ち向かう大学」としての教育・研究・地域貢献を可能とする新たな教育研究組織を構築
- 学類と学系、研究科の関係性を整理し、教育と研究を車の両輪として一体的に行うことが可能となる新しい教育・研究組織を創造
- 地方創生を目的とした定員増も見すえ、本学の発展をめざす

大学改革の進め方

- 長期的に持続可能な新しい大学への転換をめざし改革を推進
- スリム化とイノベーションによる強化を進め、本学の「強み」を先鋭化
- 県内唯一の国立大学としてリーダーシップを発揮し、県内外の高等教育機関との連携を強化し、機能の共有・協働も実質化



本事業については
こちらから
ご覧いただけます



「東日本大震災・原子力災害から10年の歩み 共に生きる」を発刊



2011(平成23)年3月11日、あの日から福島大学は何ができるのか、何をすべきなのかを考え、地域と共に歩んできました。そして、震災後10年間に福島大学が取り組んできた活動の一部を10のエピソードとして本誌で紹介しています。また、これらエピソードではそれぞれ、活動を行うことになった背景や活動内容、現在取り組んでいること、そして未来につなぐ目標や課題についてふれられています。

震災10年の節目を迎えましたが、これからも福島大学は私たちのふるさと「福島」で、復興への支援の歩みを止めることなく、一緒に取り組んでいきます。

本冊子をご希望の方は福島大学広報係までご連絡ください。
電話：024-548-5190 メールアドレス：kouho@adb.fukushima-u.ac.jp

福島大学うつくしま福島未来支援センター創立10周年シンポジウム 「ほんとの空が戻る日まで ～東日本大震災から10年～これまでの取組みと今後～」



福島大学うつくしまふくしま未来支援センターは設立10周年のシンポジウムを2021(令和3)年3月11日よりオンライン配信しました。

動画では福島県企画調整部の橋清司部長による「震災復興に向けての福島県の取組みと大学に期待すること」と題した基調講演や、松本幸英檜葉町長が、避難指示解除後5年半が経過し全町民の60%近くが帰還している町の取組みと今後の展望について、浅野燃系株式会社の浅野雅己社長が、2021(令和3)年10月に工場建設を予定している双葉町への想いを語りました。

また、福島県立ふたば未来学園の南郷市兵副校長、三浦浩喜学長、行政政策学類4年の前田悠さんによる鼎談にて、「これからの福島を担う若者をどのように育てるか」をテーマに意見が交わされました。

震災・復興展示コーナー「東日本大震災 福島大学の記憶」を開設

震災後の福島大学の取り組みを多くの皆様に知っていただき、福島復興の希望の光を見つめつつ、震災・原発事故の記憶を深く心に刻んでほしいと思い、本学附属図書館内に展示コーナーを2019(令和元)年9月に開設し公開しています。

シーズン①

「東日本大震災発災と福島大学避難所」

展示期間：2019(令和元)年9月～2020(令和2)年7月

震災直後、福島大学は避難所を開設し、教職員や学生ボランティアが避難所の運営に尽力しました。そのときの写真や当時の段ボールハウスの再現、掲示物のコピーなど避難所の様子を臨場感をもって伝えられるよう工夫しました。



シーズン②

「人間発達文化学類 子ども支援ボランティアの四季」

展示期間：2020(令和2)年8月～

発災直後から学生による子ども支援活動を組織的に行ったのは人間発達文化学類でした。震災の経過とともに場所や支援内容も段階的に変化していく支援活動の様子や、被災した子ども一人一人と向き合った学生ボランティアセンターによる取り組みなどについて紹介しています。



以降、以下のような展示を予定しています

- ・福島大学災害ボランティアセンター
- ・OECD東北スクールと東北復興債〈環WA〉in PARIS
- ・ふくしま未来学とむらの大学
- ・福島大学の放射能対策
- ・うつくしまふくしま未来支援センターの取り組み

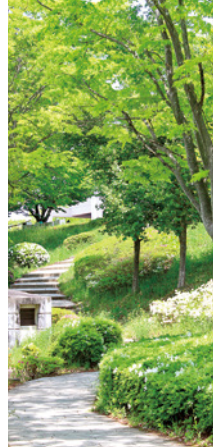
食農学類附属発酵醸造研究所の開設

2021(令和3)年4月1日、食農学類に「附属発酵醸造研究所」を開設しました。

本研究所は、発酵醸造素材作物の生産から発酵微生物、発酵醸造食品とその機能までを包含する総合的な基盤研究を展開し、地域の農林水産業、食品関連産業に関連する課題解決型研究(ローカル)プロジェクトを産官学連携による橋渡し研究として推進します。さらにこれらの成果を国際的な課題、地球規模の課題の解決にも繋げる学際的前端(グローバル)研究として発展させることを目指しています。

本研究所にはフードチェーンに沿って「素材生産・環境部門、発酵醸造食品部門、食健康・社会実装部門」を、また部門横断的な位置付けで大容量の情報・データを扱う「データ科学部門」が配置されています。また、発酵醸造の総合的・学際的な研究プロジェクトを推進するために、これら4研究部門を統括する「研究統括部門」を配置し、研究プロジェクト推進のための研究所の管理・運営を行います。

発酵醸造研究所について → <http://www.agri.fukushima-u.ac.jp/facility/IFeS.html>



新型コロナウイルス感染症 学生への支援と奨学金の設立

福島大学では、新型コロナウイルス感染拡大の影響で経済的に困窮する学生へ以下の支援を行っています。

◎学生へ食料等の支援物資配付

外出自粛やアルバイト等の収入減を余儀なくされた本学学生に対し、地元企業や市民の方々から提供いただいた食料品などの多くの支援物資を配付しました。



支援物資を配布する職員 支援物資の受け取りのため並ぶ学生達

◎福島大学緊急学生支援奨学金の新設

緊急支援を目的として2020(令和2)年4月より支援金の募集を開始し、その支援金を活用した学生への緊急支援策として、「福島大学緊急学生支援奨学金」を5月に新設し、学生1人あたり5万円の貸与を開始しました。これまで12名の学生がこの制度を活用しています。

◎経済的に困窮する学生へ1万円を給付

全学生に向け募集を行った結果、留学生を含む909名の学生への支援を決定し1万円の給付を行いました。内訳は、学類生869名、大学院生40名です。

福島大学はこれからも「福島大学基金」も活用しながら、学生が修学を断念することのないよう、しっかり支援していきたいと考えています。支援金は右QRコードより引き続き受け付けております。



福島大学絆会設立 ～第1回交流会を開催～

福島大学は、これまでに一つ一つ築いてきた産学官金の知的・人的ネットワークを活用して更に連携体制を強固なものにするべく、今まで以上に現場の「ニーズ」を発掘し、それに応え、地域産業の活性化に寄与していくことを目的に「福島大学絆会」を2019(令和元)年10月に設立しました。

そして2020(令和2)年10月7日、本会会員参加の「第1回交流会」を開催しました。交流会には会員60名が参加し、福島県地中熱利用技術開発有限責任事業組合の小野勇人氏や株式会社IH 仙台支社福島オフィスの森藤俊和所長、そして本学教員による講演があり、終了後は参加者同士の名刺交換会や交流が行われました。



福島大学絆会 HP → <http://gakujiyutu.net.fukushima-u.ac.jp/kizuna/>



福島大学「学生ジャーナリスト」結成!!

福島大学では、学内の魅力を発信するチーム「学生ジャーナリスト(通称:GJ)」を新たに結成しました。

2020(令和2)年4月よりメンバー募集を始め、同年7月までに一期生26名が集まりました。(2021(令和3)年5月現在36名)

組織の構成としては、放送班、SNS班、写真班、めばえ班、翻訳班の5班で、各班が協力し合いながら、学内外に向けて「顔の見える大学」として、学生ならではの視点・立場で広報活動に挑戦しています。



学生ジャーナリストのロゴマーク

～これまでの活動実績～

- ・YouTube「めばえちゃんねる」始動(めばえ班)
- ・めばえラジの収録・放送(放送班)
- ・大学概要冊子掲載写真の撮影(写真班)
- ・Instagramで福大クイズを配信(SNS班)
- ・新型コロナウイルス感染症対策
構内アナウンスの収録
- ・キャンパス案内動画の制作
- ・大学見学における中学生に向けた動画制作
- ・学生ジャーナリストのロゴマーク作成

